

二條天皇 香隆寺陵鳥居改築工事に伴う立会調査

二條天皇香隆寺陵は、京福電気鉄道（嵐電）北野線の北野白梅町駅から北北西へおよそ 430 m、京都府京都市北区平野八丁柳町に所在する。その立地は、花山天皇紙屋川上陵と同様に京都盆地の北西を画する船山、釈迦谷山、（左）大文字山、衣笠山の山麓から南東方向へと広がる段丘上にあたっている。

当陵の墳塋や拝所は「周知の埋蔵文化財包蔵地」、すなわち「遺跡」に含まれてはいないが、参道の南半分は、飛鳥時代から室町時代にわたる複合集落遺跡である「北野遺跡」の範囲に含まれている。また、西へ 140 m ほどの馬代通りの西側一帯は、陵名の由来である「香隆寺跡」が想定されており、そのさらに西側には、足利尊氏の墓が所在する等持院がある。桜の名所としても名高い古社・平野神社へは、東北へおよそ 300 m で至る⁽¹⁾。

第 78 代二條天皇は、平治元年（1159）に勃発した「平治の乱」時の天皇であったことで知られる。永万元年（1165）6 月 25 日、病を得ていた天皇は、わずか数え年 2 歳の皇子・順仁を親王、皇太子とし、その日のうちに譲位するも、一月後の 7 月 28 日（現行太陽暦換算 9 月 12 日）に崩御した。遺骸は、8 月 7 日に「高隆寺原」⁽²⁾、「香隆寺北東氷室山東」⁽³⁾、「香隆寺良野」⁽⁴⁾とされる場所にて火葬され、嘉応 2 年（1170）にいたって、天皇の遺骨が香隆寺の本堂から三昧堂へと遷されている⁽⁵⁾。なお、この三昧堂は、仁安元年（1166）に天皇の遺宮を用いて造立されていたものである⁽⁶⁾。

後世、香隆寺の所在が失われるとともに陵所も不明となり、「幕末の修陵」においても治定にはいたらなかった⁽⁷⁾。結局、後年皇統に加列された長慶天皇の陵と明治以降に崩御された天皇の新規營建陵を除く歴代天皇陵の中ではもっとも遅れ、明治 22 年 6 月に治定された。この時の書類には、現在の場所への決定がかなりの苦心の末であったことが記されている⁽⁸⁾。現在の墳塋は、明治 26 年に竣工が奉告された工事により新営されたもので⁽⁹⁾、現状で、直径およそ 18 m、高さおよそ 1.5 m の円丘である（第 9 図）。

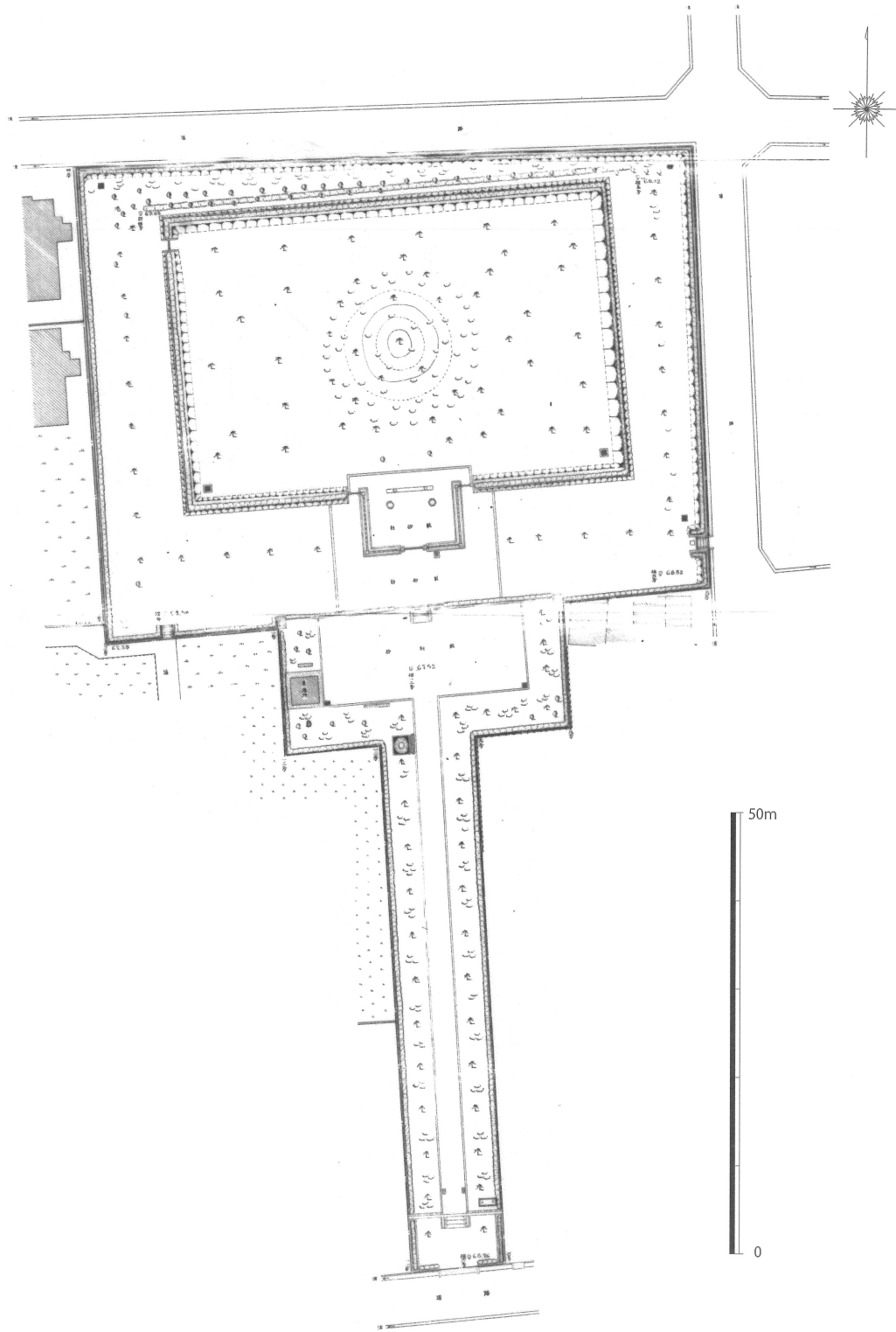
当陵における調査事例としては、昭和 55 年に実施した電灯線埋設工事に伴うもの⁽¹⁰⁾、同 57 年に実施した排水管整備工事に伴うもの⁽¹¹⁾、昭和 62 年に実施した鳥居改築工事に伴うもの⁽¹²⁾、平成 16 年に実施した見張所改築工事に伴うものがある⁽¹³⁾。当工事は、昭和 62 年に建てた木造鳥居が老朽化したことから実施されたものである。

今回の鳥居改築工事は、成務天皇狭城盾列池後陵、花山天皇紙屋川上陵と当陵の 3 陵の鳥居改築を一括で発注したもので、工期は令和元年 11 月 14 日～2 年 3 月 19 日であった。当陵については、陵墓調査室員と現地の監区職員立ち会いの下で 12 月 23 日に掘削を開始し、既存基礎の撤去が終わって完掘したのち、27 日まで記録化作業を行った。また、新規基礎の設置と周囲の埋め戻しがおこなわれた令和 2 年 1 月 6 日、同 21 日には、現地の監区職員が立ち会い、排土中に遺物が含まれていないかの確認に努めた⁽¹⁴⁾。

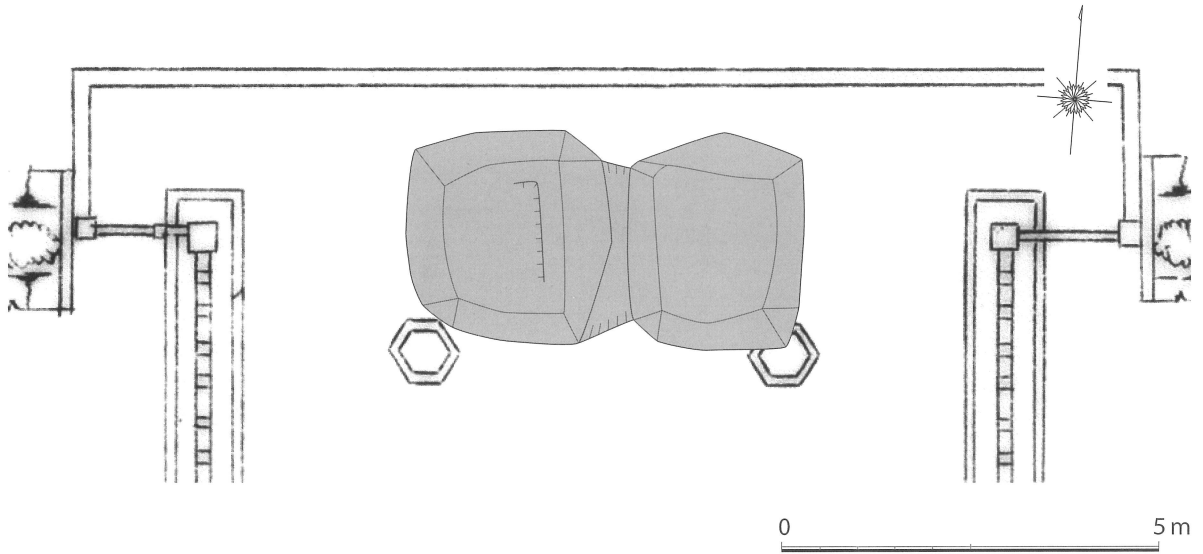
掘削箇所は、既存基礎の撤去を伴ったことから、既存基礎よりも一回り大きい、長さ・幅ともおよそ 2 m、深さおよそ 1.4～1.6 m のものが 2 箇所であったが、崩落の危険があったため、両基礎箇所の間の部分も一部掘削した（第 10 図、図版 9）。

今回の掘削箇所での土層は、過去の工事の掘削が幾度も切り合っているため、かなり複雑な様相を呈していたが、その性格から大きく 5 層に大別できる（第 11 図）。I 層は、拝所内に敷き詰められた白砂の層である。II 層は、先代以前の鳥居など、拝所造成以降に設置された工作物の設置・撤去に関わるものや、拝所の整地に関わる土層である。III 層は拝所そのものの造成土。IV 層は遺物を包含しており、拝所造成以前に人為的改変を受けていた層で、V 層は地山層である。

掘削中に西側基礎掘方の V 層直上から 80cm×50cm×30cm 程の切石が出土し、その北側と南側にも 25cm×25cm×25cm 程の切石が並んで置かれていた。当初は埋め殺された石垣などの存在を想定したが、裏込めが無かったこと、石を境とする土層の変化が見られなかったことから石垣ではないことが判明した。その後掘削した東側基礎掘方においても相対する位置で同様の石が確認されたことから、これらの石は、過去の鳥

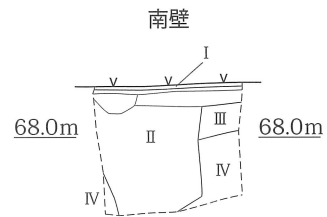
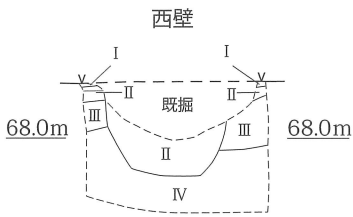
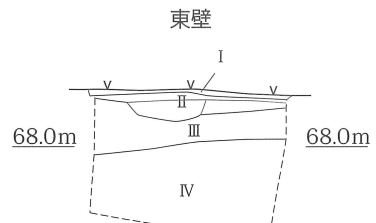
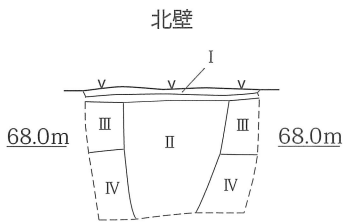


第9図 香隆寺陵 陵墓地形図 (1/750)

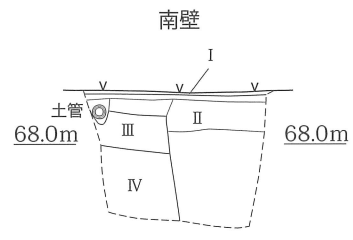
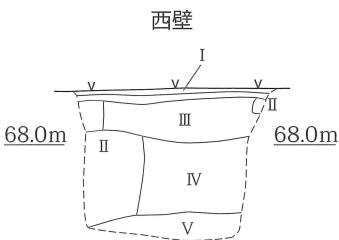
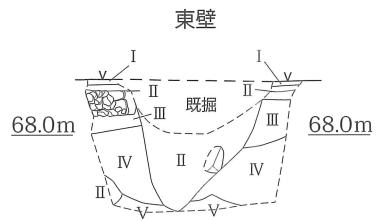
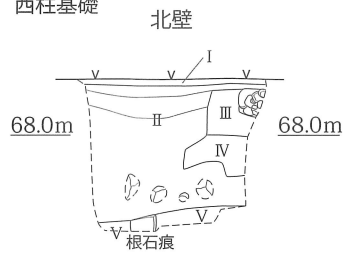


第10図 香隆寺陵 掘削箇所位置図 (1/100)

東柱基礎



西柱基礎



第11図 香隆寺陵 掘削箇所断面図 (1/80)

居の基礎に置かれていた根石と判断され、工事の支障となることから、撤去した。

先にも述べたように、当陵は明治22年に治定され、工事が翌年から26年にかけて行われているので、IV層の形成がそれまでに行われたものであることが確実である。

遺物としては、陶磁器片や瓦片など、10点を回収しているが、いずれも近現代のものである。IV層の壁面で確認した遺物はいずれも微細片であったため、回収しなかった。

なお、今回の調査において確認したIV層は花山天皇紙屋川上陵で確認した遺物包含層とよく似ており⁽¹⁵⁾、両陵の所在も近いことから、紙屋川上陵のものと同様に、近世以前から形成されていたものであったと思われる。

以上、今回の掘削箇所においては保存すべき遺構は確認されず、工事は予定どおり施工された。

(有馬 伸)

註

- (1) 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「京都市遺跡地図提供システム」
<http://keikan-gis.city.kyoto.lg.jp/kyotogis/iseki/main>
- (2) 「高隆寺」は「香隆寺」と音が同じであり、同じ寺院を指しているものと解釈される。
「顕広王記」長寛3年8月7日条（高橋昌明・樋口健太郎「国立歴史民俗博物館所蔵『顕広王記』応保三年・長寛三年・仁安二年巻」『国立歴史民俗博物館研究報告』第139集、国立歴史民俗博物館、2008年）。
- (3) 「皇代記」二條天皇 永万元年8月7日条〔塙保己一編『群書類従』卷第三十一帝王部三（『群書類従』第3輯 帝王部、続群書類従完成会、訂正三版、1993年）〕。
- (4) 「帝王編年記」卷廿一第 七十八代二條院 永万元年8月7日条（黒板勝美編『新訂増補国史大系』第12巻 扶桑略記 帝王編年記、吉川弘文館、1932年）。
- (5) 「百鍊抄」第八 高倉天皇 嘉応2年5月17日条（黒板勝美編『新訂増補国史大系』第11巻 日本紀略 百鍊抄、吉川弘文館、1929年）。
- (6) 「百鍊抄」第七 六條天皇 仁安元年7月26日条（黒板勝美編『新訂増補国史大系』第11巻、前掲註（5）文献）。
- (7) 谷森善臣「山陵考」（外池 昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年）。
- (8) 「顯宗武烈光孝村上冷泉圓融三條二條順德仲恭光明諸天皇御陵及後白河院准母上西門院御陵菟道稚郎子宇治墓ヲ修繕ス」内閣記録局編『法規分類大全 第二編』卷六 宮廷門 儀制門 族爵門、1893年。
なお、上掲書は「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧することができる。
国立国会図書館「国立国会図書館デジタルコレクション」
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/994247>
- (9) 「第三四號顯宗天皇御陵外十四御陵墓火葬所修營竝官幣中社赤間美也社務所等移轉ニ関スル件」諸陵寮『明治25年 工事録』2（宮内公文書館所蔵、識別番号：2438-2）。
「第三號顯宗、武烈、光孝、村上、冷泉院、圓融院、三條院、後一條院、二條院、安德、順徳院、仲恭、光明院各御陵及綏靖、崇峻、弘文、天武、持統、文武、淳仁、桓武各御陵御像營竣工奉告祭竝同上ノ儀孝明天皇御陵へ奉告ノ為御祭典ノ件」諸陵寮出張所『明治26年 祭祀録』（宮内公文書館所蔵、識別番号：24253）。
- (10) 石田茂輔「昭和五十五年度 陵墓関係調査概要 調査の全容」『書陵部紀要』第33号、宮内庁書陵部、1982年。
- (11) 石田茂輔「昭和五十七年度 陵墓関係調査概要 調査の全容」『書陵部紀要』第35号、宮内庁書陵部、1984年。
- (12) 飯倉晴武「昭和六十一年度 陵墓関係調査概要 調査の全容」『書陵部紀要』第39号、宮内庁書陵部、1988年。
- (13) 清喜裕二「二條天皇 香隆寺陵見張所改築工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第57号、宮内庁書陵部、2006年。
- (14) 本件調査に関しては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の清水早織氏に現地を検分していただき、種々のご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。
- (15) 有馬 伸「花山天皇紙屋川上陵鳥居改築工事に伴う立会調査」、本誌。



1 東柱基礎 北壁（南から）



2 東柱基礎 東壁（南西から）



3 東柱基礎 南壁（北から）



4 東柱基礎 西壁（東から）



5 西柱基礎 北壁（南から）



6 西柱基礎 東壁（西から）



7 西柱基礎 南壁（北から）



8 西柱基礎 西壁（北東から）